

# 【春子手記】

日ごとに暖かくなり、春めいてきました。今回は、現在当館にて開催している企画展「～二・二六事件から90年を経て～『Why was he targeted? なぜ彼は狙われたのか?』」の中から「春子手記」を“イッピン”としてご紹介いたします。

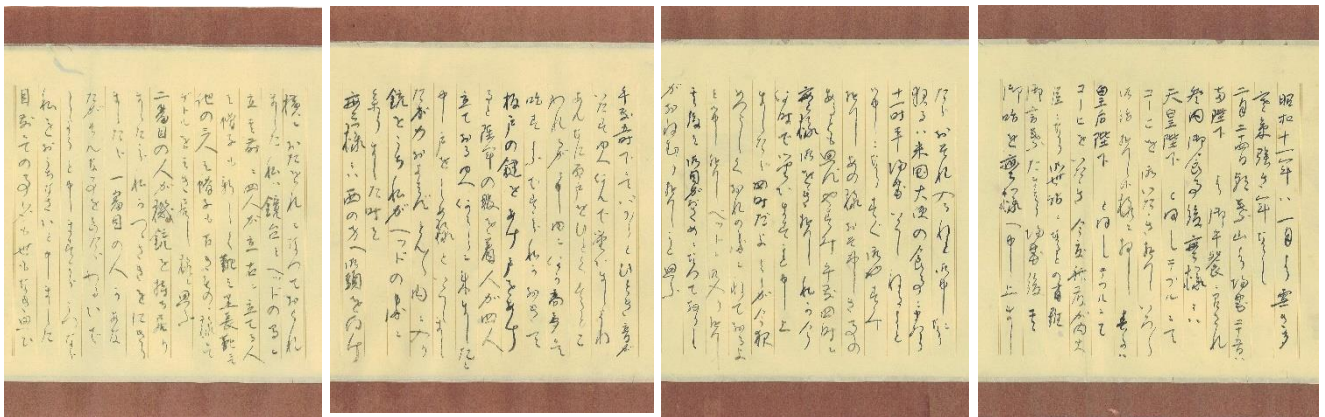
この手記は、昭和11（1936）年に2月26日に発生した「二・二六事件」からおおよそ30年後の昭和38（1963）年、春子が91歳の時に記述した追想記録です。

春子は實が亡くなったあとも東京で過ごしていましたが、空襲が激しくなった昭和20（1945）年3月、数え73歳で實の故郷である水沢に疎開し99歳で亡くなるまで余生を過ごしました。

記述は「昭和十一年ハ一月より雪多く」という書き出しから始まります。2月24日朝、葉山の別荘から帰宅し25日に天皇両陛下との午餐に招待され参列したと続きます。夜には前回の“イッピン”でもご紹介した米国ジョセフ・C・グルー大使の食事に参加し、11時半に帰宅…とあり、事件発生前夜の様子も細かくつづられています。

そして翌朝午前5時頃、兵士おおよそ150名が四谷邸を取り囲み4名の青年将校に襲撃され實は命を落としました。

悲惨な事件によって、帰らぬ人となってしまった實。春子の明瞭な記述から情景が目につくか、最愛の夫を想う気持ちが伝わってきます。ぜひ当館に足をお運びいただき2階北側展示場にて実物をご覧ください。



昭和十一年ハ一月より雪多  
 寒気強き年なりし  
 二月二十四日朝葉山より帰宅二十五日ハ  
 両陛下より御午餐ニ召され  
 参内御事後實様ニハ  
 天皇陛下と同じテブルニテ  
 コーヒを御いた、き遊しいろいろ  
 御話遊し候二拝し春子ハ  
 皇后陛下と同じテブルニテ  
 コーヒをいた、き今度齋藤が内大  
 臣ニなり御世話ニなるとの有難  
 御言葉たまはり帰宅後其  
 御話を實様へ申上まし  
 たらおそれ入るねと御申二なり  
 夜ハ米国大使の食事ニまゐり  
 十一時半帰宅いたしねるよと  
 御申ニナリスグ御やすみ(略)  
 午前五時下ニテバリバリとひととき音が  
 いたすゆへ何んで御座いましよ  
 あんなに雨戸をひとくするとこ  
 われるがと申内ニ何か高声ニテ  
 話すよふですから私かおきて  
 板戸の鍵をあけ戸をあけ  
 立と陸軍の服を着た人が四人  
 申し戸をしめ様といたしまし  
 たが力及はずとんと内ニ入り  
 銃をうち私がベットの處ニ  
 参りました時は  
 實様ニハ西の方へ御頭を向け  
 横ニおたをれニなつておられ  
 ました私ハ鏡台とベットの間に  
 立ち其前ニ四人が立ち右ニ立てる人  
 は帽子も新しく靴は黒靴ニテ  
 他三人は帽子も古きもの、様ニテ  
 ゲートルをはき居し様ニ思ふ  
 二番目の人が機関銃を持ち居り  
 ましたから一番目の人があな  
 たがそんな事をしたらわら  
 しょうと申しますからうつなら  
 私をおうちなさいと申しました  
 目前ニテの事身も世もなき思ひ